都留文科大学研究紀要　第83集（2016年３月）
The Tsuru University Review, No.83（March, 2016）

万葉集と童謡・唱歌・わらべ歌
― 山上憶良の七くさの歌の意義 ―

On the Manyōshū and Children's Songs:
The Significance of Seven Autumn Flowers Songs which YAMANOUENO Okura Sang

鈴木武晴
SUZUKI Takeharu

一、序

万葉集の巻八には、天平二（七三〇）年の秋の作と推定される、山上憶良（当時筑前国守）の七種の花の歌（いわゆる七草の歌）が収められている。次のとおり。

山上臣憶良、秋の野の花を詠む歌二首

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花　その一
（一五三七番歌）

萩の花尾花葛花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔の花
その二（一五三八番歌）

二首双方の第五句の次に記された「その一」「その二」は歌謡の記号で、「一番の歌詞」「二番の歌詞」の意味を表す。

先師伊藤博は、第一首の「指折りかき数ふれば」、第二首の「また」等の考察に基づいて、この二首が子供を対象にして唄われた歌であることを明らかにした（『萬葉集の歌群と配列　下』第九章第二節「七草――憶良の歌二首」、一九九二〈平成四〉年三月二十日、

塙書房発行、初出は「万葉歌釈注」、文芸言語研究文芸篇15集、一九八九〈平成元〉年三月。『萬葉集釋注四』、一九九六〈平成八〉年八月二十五日、集英社発行など）。

この卓説を受けて、本稿者は拙著『テーマ別万葉集』（二〇〇一〈平成十三〉年二月二十五日、おうふう発行）の「七、万葉の親子」の章の中で、第一首一五三七番歌の「指」について、

今、「手」（おてて）、「足」（あんよ）というごとく、幼児語であったか。

と記した。また、この二首を「花かぞえ歌」と表現し、「かぞえ歌の最初」と定位した。けれども、脚注ゆえ、意を尽くしていない。よって、小論をなし、日本歌謡史上の意義、教育史上等の意義を具述する次第。

二、「七種の花」と「七種の宝」

具体的な考察に入る前に、当面歌二首の現代語訳を記しておこう。

秋の野に咲いている花を、こうやって指を折って数えると、七種の花があるよ。（一五三七番歌）

一つ萩の花、二つ尾花、三つ葛花、四つなでしこの花、五つにおみなえし。ほら、まだあるよ、六つ藤袴、七つ朝顔の花。（一五三八番歌）

第一首一五三七の結句「七種の花」の表現には、憶良が歌に込めた思いが結晶していると考えられる。

「七種の花」の表現は万葉集中にこの一例のみであるが、「七種」の語は、憶良が当面歌と巻五・九〇四番歌に二回用いている。その九〇四番歌は、筑前の国から帰京した後の作と推定される「男子名は古日に恋ふる歌三首」（巻五・九〇四～六番歌）の長歌で、憶良はその冒頭部に「世の人の　貴び願ふ　七種の宝も　我は　何せむ」（「世間の人が貴び願う七種の宝も、私にとっては何になろうぞ」の意味）と詠み、仏教で珍重する「七種の宝」（金・銀と瑠璃・碼磁などの五つの宝玉）よりも、子供の方が貴いという考えを主張している。このことから、憶良は当歌において仏教の「七種の宝」を意識し、それと対置させる形で「七種の花」を詠み、その「七種の花」と密接にかかわる子供たちの貴さを伝えようとしたものと考えられるのである。

この考えを保証する例が、神亀五（七二八）年七月二十一日の憶良の三部作（巻五・八〇〇～一、八〇二～三、八〇四～五番歌）の第二作「子等を思ふ歌」（八〇二～三）である。その長歌八〇二に、

瓜食めば　子ども思ほゆ　栗食めば　まして偲はゆ　いづくより　来りしものぞ　眼前に　もとな懸かりて　安寝し寝さぬ

と歌い、子供の好物である植物の実「瓜」「栗」を子供を思わせるものとして挙げ、反歌八〇三では、

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも

と、金・銀・宝玉を挙げ、それら勝れた宝も子供という存在の貴さには及ばないことを、反語形式によって強く響かせている。[注1] この歌の「金」「銀」「玉」は仏教にいう「七種の宝」を意識したものと考えられる。となると、憶良は当面の七くさの歌以前の「子等を思ふ歌」の創作時点ですでに仏教の「七種の宝」を意識していたということになる。

その「七種の宝」の「金」「銀」「玉」と対照的に、子供と密接にかかわり子供を思わせる植物の実「瓜」「栗」を詠んでいるのである。このことから、同様に、当面の一五三七番歌の植物の花の「七種の花」も、仏教の「七種の宝」に対して、子供と密接にかかわる生命的存在を表す語として用い、そしてそれを一五三八番歌で具体化して詠じたと捉えることができよう。

憶良は秋の野の可憐な「七種の花」と愛らしい子供たちとを重ね合わせるようにして歌詠を成したのである。子供は花のような存在であり、そのかわいい手はまさに五弁の花のようである。それゆえ先掲拙著に、第二首一五三八について、次のように記した想像も許容されよう。

花の名のみからなる歌だが、心が満たされあたたかくなる不思議な歌。憶良の指の動作に合わせてかわいい花のような小さな手の指を折って花の種類を数えていた子もいたであろう。

後世の例であるが、花と子供との関連を記した岡倉天心『茶の本』第六章「花」の、次のような文章が参考になる。

花のもつ清らかな優しさは、あたかも美しい子供をみつめていると、うしなわれた希望がよび覚まされてくるように、宇宙に対して失ないかけている信頼を回復してくれる。（宮川寅雄訳、注の講談社文庫『茶の本』〈昭和四十六年七月三十日発行〉に拠る）

三、「指」「指折り」と童謡・唱歌・わらべ歌

当面歌一五三七の「指」は、「おゆび」の「ゆ」が「よ」に変化した語である。先師は『和名類聚抄』（十巻本巻二）の「指」の項に、「由比、俗云於与比」とあることに基づいて、先掲論文に、「オヨビが俗の呼称であったということであれば、子供相手の歌における言葉としてはまことにぴったりだと言えよう。」と記し、さらに前掲『萬葉集釋注四』の一五三七番歌の釈文に「オヨビは俗の呼称、つまり子ども向けの言葉であったと推測されるのである。」、語注に「上代では児童語であったということも考えられる。」と述べている。少なくとも、憶良が子供用の語として「指」を用いたことは確実と思われる。

では、この「指」を子供対象に用いた歌は他にあるのか。歌謡史の観点から調べてみると、「および」の原形「おゆび」を用いたわらべ歌「おゆびとおゆびがパーチパチ」（類同の歌に「おやゆび

さんでパチパチ」）があり、また、伊藤嘉子編著『保育者のための手あそび歌あそび60』（二〇〇四〈平成十六〉年三月三十一日、音楽之友社発行）の中に、伊藤嘉子作詞・木全洋一作曲の「おゆびをだそう」というタイトルの手あそび歌があるのを指摘することができる。前者は、

おやゆびさんで　パーチパチ
ひとさしゆびさんで　パーチパチ
なかゆびさんで　パーチパチ
べにゆびさんで　パーチパチ
あかちゃんゆびで　パーチパチ
きこえないから　パーチパチ

という歌で、子供の指と大人の指を親指から小指まで順に打ち合わせてゆく遊び歌である。また、後者は、1「いっぽんゆびだそう」、2「にほんゆびだそう」、3「ごほんゆびだそう」の3番までの歌詞の出だしを総括してのタイトルである。

「おゆびとおゆびがパーチパチ」と「おゆびをだそう」は、憶良歌以後、子供向けの歌に「および」の原形「おゆび」が用いられた例として貴重である。

憶良歌の「指折り」と同様、子供対象の動作「指折り」も、「数ふ」とともに、次の唱歌に用いられていて注目される（歌の引用文献は〈引用歌所収参照文献〉としてこの小論の最後に一括して明記する）。

「冬の夜」（作詞・作曲者不詳、明治四十五年三月『尋常小学唱歌（三）』に掲載）

1 燈火近く　衣縫う母は
春の遊びの　楽しさ語る
居並ぶ子供は　指を折りつつ
日数かぞえて　喜び勇む
囲炉裏火はとろとろ
外は吹雪

ちなみに、吉田拓郎作詞作曲（昭和四十六年）の歌謡曲「夏休み」は、子供時代を振り返り、子供の時点に立つ歌で、その3番の歌詞に、

絵日記つけてた　夏休み
花火を買ってた　夏休み
指おり待ってた　夏休み

とあり、参照される。

「指」の語を用いた子ども用の歌も次に掲げておこう。

・「いちのゆびとうさん」（まどみちお作詞・渡辺茂作曲）
・「おやゆびねむれ」（わらべ歌）
・「どの指一番早いかな」（わらべ歌）
・「おはなしゆびさん」（香山美子作詞・湯山昭作曲）
・「おやゆびこゆび」（片岡輝作詞・越部信義作曲）

・「指あてっこ」（吉本澄子作詞・石橋尚子作曲）
・「指さんどこへ」（作詞作曲者不詳）
・「指さん拍手」（阿部直美作詞作曲）
・「指のうた」　（作詞作曲者不詳）
・「指のおしくら」（作詞作曲者不詳）
・「指のトンネル」（作詞作曲者不詳）
・「ポンポンゆびなんぼん」（吉本澄子作詞・石橋尚子作曲）
・「まほうのゆび」（湯浅とんぼ作詞作曲）

「おやゆびねむれ」は、鹿児島地方に伝わるわらべ歌の子守歌で、

おやゆびねむれ
さしゆびも
なかゆびべにゆび
こゆびもみな
ねーんねしな
ねーんねしな
ねんねしな

と、五指を詠みこんでいる。

四、幼児語と童謡・唱歌・わらべ歌

拙著『テーマ別万葉集』の一五三七番歌の脚注の【考】に指摘したように（前掲）、憶良が「指」を子供対象の語として用いたことを保証するのが、幼児語「お手々」「お眼々」「お頭」「頭」「足」などを用いた子供対象の歌々の例である。以下、発表順に挙げてゆこう（ローマ数字で歌のタイトルを、算用数字でその曲の何番の歌詞であるかを示す）。

Ⅰ「靴が鳴る」（清水かつら作詞・弘田龍太郎作曲、大正八年十一月『少女号』に掲載）

1お手つないで　野道を行けば
　みんな可愛い　小鳥になって
　唄をうたえば　靴が鳴る
　晴れたみ空に　靴が鳴る

2花をつんでは　お頭にさせば
　みんな可愛い　うさぎになって
　はねて踊れば　靴が鳴る
　晴れたみ空に　靴が鳴る

Ⅱ「金魚の昼寝」（鹿島鳴秋作詞・弘田龍太郎作曲、大正八年七月に作曲）

1赤いべべ着た
　可愛い金魚
　お眼々をさませば
　御馳走するぞ

Ⅲ「めえめえ児山羊」（藤森秀夫作詞・本居長世作曲、大正十年四月『童話』に掲載）

1めえめえ　森の児山羊　森の児山羊
児山羊走れば　小石にあたる
あたりゃあんよが　あ痛い
そこで児山羊は　めえと鳴く

2めえめえ　森の児山羊　森の児山羊
児山羊走れば　株こにあたる
あたりゃ頭が　あ痛い
そこで児山羊は　めえと鳴く

Ⅳ「夕焼小焼」（中村雨紅作詞・草川信作曲、大正十二年七月『文化楽譜―あたらしい童謡（一）』に掲載）

1夕焼小焼で　日が暮れて
山のお寺の　鐘がなる
お手々つないで　皆かえろ
烏と一緒に　帰りましょう

Ⅴ「赤い帽子白い帽子」（武内俊子作詞・河村光陽作曲、昭和十三年『キングレコード』より発売）

1赤い帽子白い帽子　仲よしさん
いつも通るよ　女の子
ランドセルしょって
お手々をふって
いつも通るよ　仲よしさん

2赤い帽子白い帽子　仲よしさん
いつも駈けてく　草の道
おべんとう　さげて
お手々をくんで
いつも駈けてく　仲よしさん

Ⅵ「仲よし小道」（三苫やすし作詞・河村光陽作曲、詞は昭和十四年一月『ズブヌレ雀』に発表。同年『キングレコード』より発売）

4仲よし小道の　日ぐれには
母さまお家で　お呼びです
さよならさよなら　また明日
お手手をふりふり　さようなら

Ⅶ「たきび」（巽聖歌作詞・渡辺茂作曲、昭和十六年十二月ＮＨＫ『子供テキスト』に掲載され、同『幼児の時間』で放送）

2さざんか　さざんか　さいたみち
たきびだ　たきびだ　おちばたき
「あたろうか」「あたろうよ」
しもやけ　おててが　もう　かゆい

Ⅷ「緑のそよ風」（清水かつら作詞・草川信作曲、昭和二十三年ＮＨＫ「全日本児童唱歌ラジオコンクール」で放送され、十二

月にレコード化）

2緑のそよ風　いい日だね
　ぶらんこ　ゆりましょ歌いましょ
　巣箱の円窓　ねんね鳥
　ときどき　おつむが　のぞいてる

Ⅸ「かわいいかくれんぼ」（サトウハチロー作詞・中田喜直作曲、昭和二十五年ＮＨＫ「うたのおばさん」に発表）

1ひよこがね
　お庭でぴょこぴょこ　かくれんぼ
　どんなにじょうずに　かくれても
　黄色いあんよが　見えてるよ
　だんだん　だれが　めっかった

その他、「おてて」を用いた歌に、

「おててを上にうさぎさん」（わらべ歌、歌詞に「おてて」は三例）

「おべんとう」（天野蝶作詞・一宮道子作曲）

「おむねをはりましょ」（作詞作曲者不詳）

がある。

以上、管見に入る幼児語を用いた歌を挙げた。第三節に取り上げた「おゆび」を含めて挙列（タイトルを含む）のうちわけを示せば、「おゆび」二曲三例、「お手々」八曲十二例、「お眼々」一曲一例、「お頭」二曲二例、「頭」一曲一例、「足」二曲二例ということになる。調べてゆけば、まだ例は増えるであろう。

日本歌謡史上、このような幼児語を用いた子供対象の歌の源泉の歌として、「指」を用いた憶良の七くさの歌を位置づけることができよう。

五、花かぞえ歌――かぞえ歌の最初――

先述のように、本稿者は先掲拙著の中で、花の名を指折り数えることを唱った当面の憶良歌二首を、「花かぞえ歌」という表現で捉え、日本歌謡史上のかぞえ歌の最初と定位した。

かぞえ歌といえば、明治の「数えうた」（作詞作曲者未詳、明治二十年十二月『幼稚園唱歌集』に掲載）が知られている。その歌詞は、「一つとや」から「十とや」までの十番まであり、特にその三番には、

三つとや　みどりはひとつの
　幼稚園　幼稚園
　千種に　花咲け
　秋の野辺　秋の野辺

と、憶良歌同様、「幼稚園」に象徴される子供たちと秋の野の花のことが歌われていて注目される。

憶良歌のように、指を折って数えながら物の名を挙げてゆく歌には、「五つのメロンパン」（イギリスのあそびうた、中川ひろたか作詞）がある。これは五本の指を子どもの好物のメロンパンに見立

て、子供がメロンパンを買っていくのにつれて、「いつつ」「よっつ」「みっつ」「ふたつ」「ひとつ」と、五本の指を一本ずつ折っていき、全部売り切れの「ぜろこ」を握り拳で表すという歌である。一番の歌詞のみ掲げておこう。

パンやにいつつのメロンパン
ふんわりまるくておいしそう
こどもがおみせにやってきて
メロンパンひとつかってった

憶良歌と同様、植物の名を挙げてゆく数え歌に、次に掲げるわらべうたの指あそび歌「いもがらニンジン」がある。

イモガラ　ニンジン
さんしょに　しいたけ
ごぼうで　ホイ
むかごに　なすびに
やまいも　キュウリ
トントン　トーナス
かぼちゃで　ホイ

これは、植物の名を挙げるのと同時に、左右双方の指を一本（イモガラ）、二本（ニンジン）、三本（さんしょ）、四本（しいたけ）、五本（ごぼう）と出し、「ホイ」と両手（十指）を合わせて拍手を一回。次に、左手五本と右手一本の六本（むかご）、同様にして七本（なすび）、八本（やまいも）、九本（キュウリ）と出し、左右の握り拳を「トントン」と上下に合わせ、「トーナス」（十なすの意）で左右の握り拳をパッと開き、両手を胸のところで内に三回まわして（かぼちゃ）、「ホイ」と拍手一回という動作の歌である。これと類同するわらべ歌に「いちじくにんじん」（歌詞は「いちじく　にんじん　さんしょに　しいたけ　ごうぼうで　ぽん」）がある。

指を使って物を挙げ数える数え歌のその他の歌は、タイトルのみを記しておこう。

・「五人のこびと」（作詞作曲者不詳）
・「十人のインディアン」（アメリカ民謡、高田三九三作詞）
・「ニワトリかぞえうた」（阿部直美作詞作曲）

六、花とその名を数え教えるということ
――生命と教育と地球環境――

以上、山上憶良の七くさの歌が、日本歌謡史上、童謡・唱歌・わらべ歌などの子供対象の歌の原点に立つことを、歌例を挙げて論証した。

七くさの歌の意義は、日本歌謡史上の意義にとどまらない。教育史の上でも、地球環境を考える上でも、重要な意義を有していると思われる。

秋の野に咲く可憐な七くさの花を実際に見ながらその名前を数え教えるということは、教育の根本にかかわる重要なことである。なぜなら、生物の名前とその生命的個性を知り把握することは、生物

の生命を大切にすることに直結するからである。

科学技術の進歩による経済発展等に伴う地球環境の破壊も、人間が、自然を形成する様々な生物の名とその生的実態にあまりにも無知で、生物の生命をないがしろにしていることが深く関わっていると思われる。

憶良の七くさの歌は、自然環境の中で奇跡的に咲く様々な生命を尊ぶことを教えてくれる歌である。

（二〇一五〈平成二十七〉年九月二十三日）

〈注〉

1、八〇三番歌の読解については、拙論「勝れる宝子に及かめやも」（「国文学論考」第五十号、二〇一四〈平成二十六〉年三月十五日発行）を参照されたい。

〈引用歌所収参照文献〉

a、与田準一編『日本童謡集』（一九五七〈昭和三十二〉年十二月二十日、岩波書店発行）

b、堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』（一九五八〈昭和三十三〉年十二月二十日、岩波書店発行）

c、佐藤美也子編著『母と子の童謡集』（一九七七〈昭和五十二〉年七月一日、三交社発行）

d、吉本澄子『手あそび指あそび』（一九八六〈昭和六十一〉年十一月三日、玉川大学出版部発行）

e、村杉明子・吉川弓恵編集『ちびっこあつまれ！　みんな大好き234曲』（二〇〇〇〈平成十二〉年七月三十日、自由現代社発行）

f、中川ひろたか『中川ひろたかのあそびソングブック』二〇〇〇〈平成十二〉年八月、ひかりのくに発行）

g、西東社出版部編『童謡・唱歌・こころの歌』二〇〇一〈平成十三〉年九月十日、西東社発行）

h、レッツ・キッズ・ソンググループ編著『うたって楽しい　手あそび指あそび120』（二〇〇四〈平成十六〉年三月、ポプラ社発行）

i、伊藤嘉子編著『保育者のための　手あそび歌あそび60』（二〇〇四〈平成十六〉年三月三十一日、音楽之友社発行）

j、石丸由理編著『てあそび・うたあそびベスト・コレクション』（二〇〇五〈平成十七〉年九月三十日、自由現代社発行）

k、野ばら社編集部編『美しき日本のうた（増訂版）』（二〇一〇〈平成二十二〉年十月二十五日、野ばら社発行）

l、細田淳子編著『手あそび・体あそび・わらべうたがいっぱい　あそびうた大全集200』（二〇一三〈平成二十五〉年三月十日、永岡書店発行）

m、西東社編集部編『CD付き　日本のこころの歌』（二〇一三〈平成二十五〉年七月二十五日、西東社発行）

受領日　二〇一五年　十月　六日
受理日　二〇一五年十一月十一日